

千秀だより

横浜市立千秀小学校

3月号

平成31年(2019)3月 1日



うちの子ども達

校長 市川 幸男

平成31年度も、残すところあと一か月となりました。校庭に立ち、児童の遊ぶ姿を眺めていると、黒く厚いジャンパーやコートから、明るい色のトレーナーや、中には半袖のTシャツ一枚という姿の子が多くなり春の到来を感じる季節となりました。3月は、年間の学習のまとめの時期です。また、新しい学年に進級するという心構えをつくる時期でもあります。6年生は卒業式という小学校生活6年間で締めくくる最も大切な儀式的行事にむかいます。また、卒業式は6年間の学びの総決算であり、小学校生活での最後の授業とも言えます。43名の卒業生それぞれが、千秀小学校で学んだことに自信と誇りをもち、胸を張って卒業式に臨んでいかれるよう最後までしっかり指導を重ねて参りたいと存じます。

さて、先日、先生方の会話を聞いていて、ふと、今まで気にならなかった言葉が、急に気にかかるようになりました。それは、多くの先生方からでる「うちの子ども達」という言葉です。ご存知かと思いますが、押しなべて先生方は、担任している子どもを「うちの子ども」と言います。また、他校の先生方と話す時にも、けっして「千秀小学校の子どもたち」というような言い方をしません。同じように「うちの子ども達」という言い方をします。自分の子どもでもないのに「うちの子ども」というのはおかしいと思われるかもしれませんが、それが教育界では当然の言い方なのです。でも、4月開始当初はなかなかその言葉が、自然には出てはきません。家庭訪問・全校遠足・運動会と子ども達との交流を重ね、いつしか心が通い合い、お互いの存在が当たり前となったときに、心の底から「うちの子ども達」と自然に口から出るようになります。仮に本校の先生方が今、「千秀小学校の子ども達」という言い方で会話をしていたとしたら、私は校長として「先生はどこの学校の先生ですか。よくそんな他人事のような言い方ができますね。」と言うのではないかなと思います。担任する子どもたちを我が子のように思い、勤務する学校を我が家庭のように思う、それが「うちの子ども達」という言い方に象徴されているように思います。

43年間「うちの子ども達」という言い方に慣れ親しんできた私ですが、たくさんいた「うちの子ども達」も間もなく我が子だけになってしまいます。安堵感とともに、この「うちの子ども達」同様に「うちの先生達」という言い方がもうできなくなるのかと思うと、一抹の寂しさを感じます。私たち教師は、いじめ問題や学力向上にかかわる問題、児童指導における問題をはじめとして、今様々な意味で矢面に立たされています。そのような時、この「うちの子ども達」という言い方に込められた先生方の熱い思いをぜひたくさんの方々に知っていただきたいと思っています。

結びに際しまして、保護者の皆様・地域の皆様・そして本校に惜しみなくエールを送ってくださっている学校応援団の皆様には紙面上ではありますが、御礼申し上げます。来る平成31年度も「千秀の子がしなやかに、のびのびとたくましく」成長していけるよう、ご支援・ご協力をよろしくお願い申し上げます